

シアトル小児病院での研修体験記

診療部 長谷川大一郎

西暦年が4で割り切れる年の翌年の1月20日は米国合衆国大統領就任式の日にあたります。2009年1月20日、全米が新しい大統領の着任に沸きあがったこの日、私達のシアトル小児病院での研修は始まりました。

UW distinct の東に連なるなだらかな丘の上にシアトル小児病院は佇んでいます。それぞれに連結された6つのブロックを Giraffe, Train, Rocket, Balloon, Whale, Airplane など愛称で区別しているのは子供達にとって区別しやすくするためです。約10万平方kmの敷地内に最新の設備と入院や外来で病院を利用する子供達がより快適に過ごすことができよう様々な配慮がなされています。午前8時のPower breakfastで副院長 Dr. Sanford M. Melzer 先生をはじめとする諸先生に出迎えられ、病院の歴史や組織運営について解説を受けた後、私は Host Doctor で Pediatric Oncology 部門の主任であり、Children's Oncology Group の肉腫部門の議長でもある Dr. Douglas Hawkins が準備してくださった Agenda に則り、悪性腫瘍治療部門、造血細胞移植部門でそれぞれ2週間の研修を開始しました。

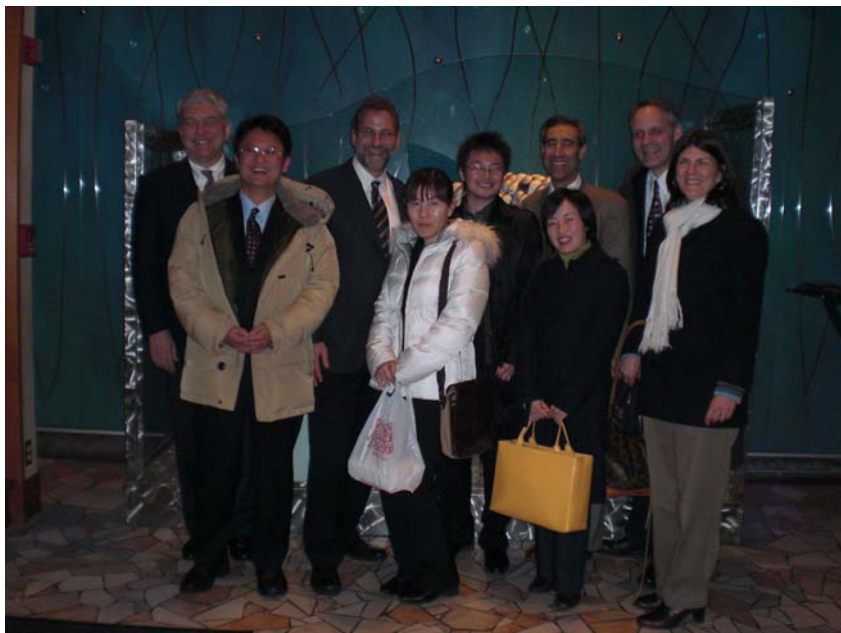


写真: 歓迎会での記念撮影。左から2番目が私。

シアトル小児病院は米国の Children's Oncology Group の基幹施設の一つであり、全米有数の造血細胞移植実施施設でもあります。Pediatric Oncology Team の中には小児で経験する様々な疾

患のそれぞれ specialist がおり、ワシントン大学医学部と Fred Hutchinson Cancer Research Center とが緊密に連携して Seattle Cancer Care Alliance という治療共同体が形成され質の高い診療、研究が行なわれています。またシアトルは骨髄移植発祥の地でもあります。骨髄移植をヒトに対する治療法として確立し、1990年にその功績でノーベル医学生理学賞を受賞した E.D. Thomas 博士はワシントン大学医学部腫瘍学講座の初代教授でもあります。現在も Fred Hutchinson Cancer Research Center の研究棟の一つには Thomas 博士の名前を冠した Thomas building があり、様々な臨床家、研修者がここに集って切磋琢磨しています。



写真:造血細胞移植チームの皆さんと

研修体験を記すに当たってシアトル滞在中に蓄えた記録やメモを起こしながら、シアトル滞在中に学んだ様々な事を思い起こしています。連日の病棟回診や外来に参加して face-to-face で情報交換を行なったことは得がたい経験となりました。また Dr. Hawkins は COG における骨腫瘍／軟部腫瘍の治療戦略などについて、Dr. Thomson からは微小残存腫瘍を利用した急性リンパ性白血病の治療戦略について、Dr. Park からは COG における神経芽腫に対する臨床試験概要などについて解説をいただきました。また SCCA BMT team の Dr. Meshinchi からは私たちが行なっている研究に対して有意義な助言をいただき、Dr. Manley とは急性リンパ性白血病に対する移植前処置について濃密な議論をすることができました。特に Fred Hutchinson Cancer Research Center と中継しつつ行なわれる Friday AM conference では時間を頂戴して我々の研究成果として JACLS ALL97/02 研究とその結果について解説させていただき、意見交換することができたことは大変有意義な機会となりました。しかしながら私がシアトルで最も強く印象を持ったことはこうした情報や技術、知識だけではありません。

“Make a difference”

Dr. S.M. Melzer から手渡された Community Benefit Report には、この言葉が踊っています。化学療法や移植で生存率の向上を追い求めるだけではなく、子供達やその御家族の意思決定やプライバシー、生活の質を大切にすること。できるだけ時間をかけ正確な情報を伝えること。また診療の質だけでなく教育や研究の質を高めることが将来の希望につながる。何より最先端の先にまだより良い医療があると考えて自己研鑽し、意欲を高めること。これがシアトル小児病院の付加価値をもたらすのだと実感しました。



写真：フェリーからシアトルダウンタウンを望む

シアトル小児病院と兵庫県立こども病院の交流はこれからも続きます。すでにチャンネルは開いています。今後も多くの仲間が海を渡りシアトルの地で様々な経験を積まれることでしょう。ある人にとっては自己研鑽の動機となるかもしれません。研修をきっかけに研究や留学の機会を得る人もいるかもしれません。日本の良さを再発見する機会となるかもしれません。もちろん言葉が通じず悪戦苦闘したりすることもあるかもしれません。そのような時、きっとシアトルのさまざまな名勝が癒してくれることでしょう。それはシアトルからオリンピック公園へ向かうフェリーから見る風光かもしれません。ある人にとっては Safeco Field で観る日本人メジャーリーガーの姿かもしれません。またある人にとってはシアトルと称される Portage Bay Café のパンケーキの美味かもしれません。

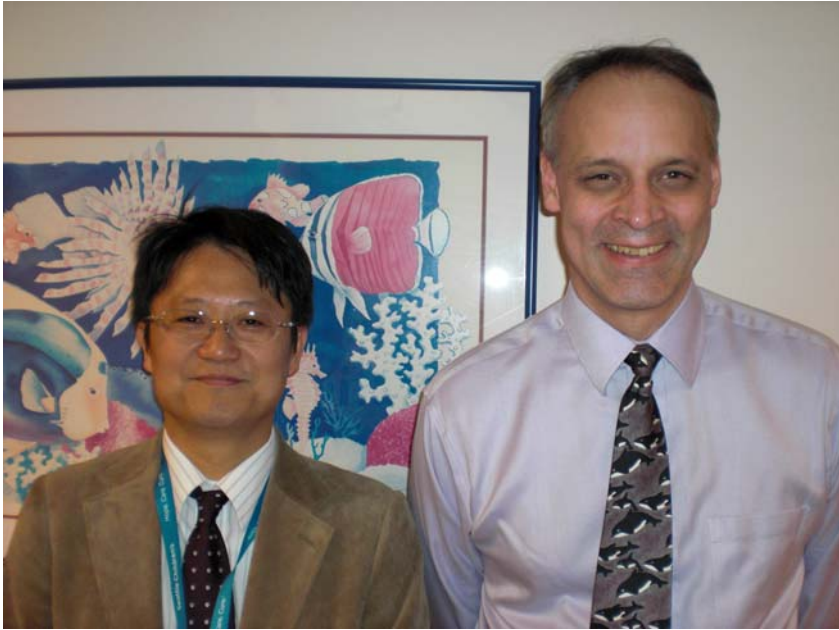


写真: Douglas. Hawkins 先生と私

本研修の機会を賜り多くの御協力をいただきました兵庫県立こども病院関係各位、シアトル小児病院関係各位、シアトル小児病院に入院／通院中の患者の皆様に深謝いたします。特にシアトル小児病院副院長 Sanford M. Melzer 先生、International Exchange 部門 Manager Julie Povick 氏、シアトル兵庫県支部所長北岡孝統氏、同副所長 Tomlinson Kayo 氏に深謝いたします。さらに研修中多くの温かい指導と議論の機会をいただいた Douglas. Hawkins 先生、SCCA 小児造血幹細胞移植部門主任 J.E. Sanders 教授に深謝いたします。

最後に、Farewell party での一場面を紹介します。

ワイングラスを重ねながら Dr. Melzer にお礼を述べていると、

『Seattle Children's は君たちの病院とどこが違っていたかね』と訊ねられました。私は、
「最先端の技術を学びたいと思ってシアトルにやって来たのだけれど、技術はそれほど違わないと感じたし、成績も大差はなかった。」

「違うのは技術ではなくて、philosophy ではないかと思った」

Dr. Melzer は一呼吸おいて、そうだろうと頷いた後、私にぐっと顔を近づけこう続けました。

『You can change.』

そして私はもちろんこう返したのです。

「Yes, we can.」